

ではある。我國では地圖を金屏風に仕立てるこ
とが特に寛永頃に流行し、世界圖、日本圖の外
西海陸細見圖などの金屏風も多くは其頃に出来
た。本圖はさうした金屏風時代の最後を飾る一
であらうと考へる。圖に一つは長谷川としるし
た印影がある。名の刻印は讀むことが出来ない

が地圖師でなくて畫家にかゝした事は、これに
よつて愈明である。故に自からかやうに、お土
井丈は當時の姿でも古い所は古圖によつたもの
であると考へる。畫家は往々にして罪なことを
するもので華押を圖の真中に寫したりして、折
角の古圖を題なしにする例がないではない。

西班牙紀行 (一)

小牧實繁

五月(一九二九年)廿一日、火曜日。六時驛前
ホテルの深からぬ眠りは覺めた。七時朝食、七
時三十二分ポルドウ驛發、西班牙に向ふ。低平
なランドの海岸平野の砂地に植ゑた松の幹に傷
をつけて樹脂を採つてゐる景色が珍らしく眺め
られる。御燈明の土器の様な器を幹に緊り着け
て樹脂を受けてゐる。又松林には牛などが飼は
れてゐる。

十時十分ダー驛(Der)着。此れより南は最早
やランドの平野の如く低平ではなくなる。
午後一時イルン驛(Irún)着。旅券の検査及
び税關の調べがあるが極めて簡單である。
一時半サン・セバスチアン(San Sebastian)
着。風光明媚な此の海岸の樂天地で一日を過ご
す積りで途中下車、ホテル・テルミニウスに入
る。

二時半宿を出て散歩。何處も同じ橋の上の大公望、面白い程大きな釣る。

兩替のため銀行(Banco)に行く。三時半まで休みだと言ふ。西班牙へ来たのだ。大人しく待つて十磅出して貰ふ。感じは悪くない。寧ろ親切に過ぎる位だ。日本人が珍らしいからでもあらう。

御寺を訪れて海岸に出る。贅澤な場所だ。海水浴の施設は充分整つてゐる。長者の遊び場なども色々出来てゐる。氣の利いた立派な別荘が無数にある。夏場の貴族達の生活振りなどを想像して見る。美しいホテルが何軒となく聳えてゐる。多くは白色に塗られてゐる此の陽氣な海岸に一際々立つた色彩を與へてゐる。

海岸の砂原に腰を下して久し振りに吞氣に海を眺める。漁師の妻でもあらう、洗濯物か何かを頭上に載せて歩いてゐる。此の風習が西班牙にも存在することを知る。

可愛い男女の子供達が偶には大人が混つて

他愛もなく砂遊びに興じてゐるかと思へば幅跳びやその他名を知らぬ危かしい遊戯に耽る臍白盛りの男の子供も居る。

カジノや御寺やを訪れて舊市街の方を歩いて見る。街衢は例によつて極めて狭い。漁夫の家が可なり多い。建築の様式は異つてこそ居れ琵琶湖の沖の島へでも来た感じである。漁具を商ふ家の飾窓を見たが中々面白い。漁具は中々複雑であると思つた。

漁師町を抜けて高みに登り港の全景を眺める高見の上には例によつて城砦がある。稍離れて測候所もある。そして山全體を繞つて立派な遊歩道が何本か通じてゐる。夏の夜は定めし氣持がよろしからう。戀もささやかれるであらう。

七時になつた。そろ／＼歸らなければならぬ。も一度よく海を眺め渡して坊を降りる。此の海を見て昔の西班牙人も葡萄牙人も育つたのである。彼等が一時歴史の大舞臺に活躍したのも偶然ではない、こんなことを考へながら。

プラザ・デ・ラ・コンステイチュション (Plaza de la Constitucion) と言ふ廣場を見、も一度海の見える邊りの御寺を訪れ、魚、果實、蔬菜などの市場を見る。

何處の子供も可愛くない子供はないが西班牙の子供、年少女の如く美しく可愛いのは世界中餘り多くはないであらう。そして彼等は如何にも天真爛漫である。一人の娘が「ベロ」(bello) と言つて異國人の自分に相手になつた。年寄だつて萬更ではない。殊にその白と黒との髪飾りは中々美しく優しい。

八時半宿に歸り夕食、九時半夜の町の中を散歩して見たが餘り面白くもない。珍らしい印の煙草を買つて楽しんだ位である。十一時に歸り就寝。

五月二十二日、水曜日。六時半起床、七時半朝食、汽車の時間が悪くて九時半まで手紙を書いたり日記を記したり等して待つ。

九時半サン・セバスタアン北驛の宿を出で十

時十四分アマラ驛 (Amara) 發、サンタンデルを指す。

ザラウズ (Zarauz) 驛の邊で海岸の砂丘を見た。耕作物では白菜、蠶豆、豌豆等が目につき農家は密集せず散村をなしてゐる。耕作には牛を役するが常に二匹を連ね併べて居るのが特異の點である。農民は多くは黒色の時としては眞赤なバスクを被つてゐる。ザラウズの驛に着くと赤色のバスク、赤色のズボンに劔を吊つた兵隊が居る。或は巡查なのかも知れぬ。

エルゴイバル驛 (Elgoibar) の邊では家屋は全く孤立的に山の斜面に點在し、山頂に至るまで小麥などが耕作せられてゐる。赤色の屋根の家の側に川が流れそれに洗濯場が設けられてゐるのなどが目につく。

一時半ビルバオ驛 (Bilbao) 着。四十五分停車。車中に冷食の中食をとる。此所は鐵礦産地の一中心であるらしくそんなことで景色は美しい所ではない。

ラマレス(Ramales)の手前で汽車は石灰岩の峡谷を通過する。景色は中々素張らしく所々に石灰洞の開口してゐるのが認められる。その中には舊器時代の遺跡もあることであらうなど考へる。

ラシネス・ウダラ(Rasines Udalla)の邊に來ると其處には美しい平和な國土が開ける。耕地と牧場が展がり斜面の上には家々が散點する。

マロン(Marron)の邊は美しい石灰岩の臺地で牧場が多く牧場は石垣と立樹とで圍まれてゐる。

ガー(Gama)の邊にはユーカリの樹が非常に多い。否ユーカリの森である。天氣は非常によく少し暑い位である。

六時八分サンタンデル(Santander)着。やれやれと言ふ氣がして汽車を下りたはいいが困つたことに佛蘭西語を解するものが居らぬ。況んや英語をや。然し何とかなるもので一人の佛蘭西語を話す男が來て呉れ、そしてやつとの事で

驛の近くの一軒の小さなレストランでオムレツと西班牙米とに有つことが出來た。いや美味かつたこと。殊に米は久し振りだ。到々二皿平げた。汚ならしいレストランの相客も定めし驚いたことであらう。

七時二十三分サンタンデル發、美しい石灰岩の牧場地を走り縫ひして八時三十分トレラヴェガ(Torrelavega)着。ここはサンタンデルより一層邊鄙な田舎である。少々心細い。それに日も暮れかかつてゐる。本當に異國に着たと言ふ感じがひし／＼と迫る。宿屋と言つても何だか汚ならしいそしてだだ平たい伽藍堂の様な感じがする。幸バルセロナの商人と稱する多少物の解つたのが相客に居り又た獨乙語佛蘭西語を話す土地の有識者らしいのが來て何をしに來たのなど聞いて呉れるので稍心安さを感じる。それに田舎宿の娘達の親切には心から感謝せざるを得なかつた。黄昏の町の中を一廻り散歩し諸君と一杯飲みながら歡談して十時半就寢。

五月二十三日、木曜日。七時半起床、八時半

朝食、九時十五分の乗合でサンチラナ (Santhil-

ena)と言ふ所まで行く。十時サンチラナ着。其

處の日用品や食料品等を賣る田舎の萬屋の様な

家でチョコレートや何かを買つて洞窟の道を尋

ね甚だ心細いが獨り解らぬ田舎道を辿る。大道

からの分れ道に Cueva de Altamira と書つて

矢の印がしてある。それを右手に取るんだが道

は少し細くなる。然し自動車で乗着ける豪勢な

御客もあると見え可なりなドライブ道になつて

はゐる。基盤の地質は石灰岩で美しい緑草に被

はれてゐる。牧場になつてゐるんだ。牛が澤山

飼はれてゐる。耕地との間には石垣が繞らされ

てゐる。牛に着けた鈴の音が長閑に聞える。石

灰岩を切つて新道を作つた所では水平の層序が

明瞭に看取される。擬ふ方なきドリネの地形の

認められる所もある。然しながら景觀の大體の

印象は柔かな曲線美の緑の丘と言へよう。婦人

の驢馬に跨つて行くものがある。風景の全體が

繪である。遠くにはユーカリの森が見える。

十時半洞窟に着く。然しそれは全く豫期した

ものとは別なものであつた。第一未だ中々目的

地に着かうとは思つてゐなかつた。又洞窟があ

るならも少し峻しい崖でもあるだらうと考へて

ゐた。處が平かな丘の上、平凡な斜面を上り詰

めんとする處、其處に自分が遙々訪ね求めて來

た洞窟はあるのである。道普請の土方にクエヅ

アは何處かと聞いて見てもどうも之れに間違は

ないらしい。そして其處には陳列館もあるのだ

から。

先づ陳列館に案内を乞ふ。主任の人が出て來

られる。幸此の人は英佛語を話すのでやれ／＼

と安心する。署名を求められるので日本人某と

書く。日本人では臺灣の移川氏、京都の濱田博

士、梅原氏、東京の龜井氏、幸田氏等が來られ

たことを覚えてゐる。暫らく話して洞窟の方へ

案内せられる。

その入口と云ふのがなだらかな斜面の横腹に

ついでゐるのだから變つてゐる。今は扉を造り平常は鍵をかけてゐる。そしてスウィッチをひねると内部に點燈せられる様になつてゐる。或る部分は石箱下の堆積層が中々厚い。そして貝を發見する。標本を二三採集させてもらふ。何れも *Patella vulgata* である。

有名な壁畫のある室へ案内せられる。スウィッチをひねると室中が明るくなる様に仕掛けてある。局部細査用にコードの着いた電燈まで用意せられてゐる。そして今では大體立つてゐて見られる様に地面を削り取つてある。以前はさうは行かなかつた。尤も今でも最もよく鑑賞するには仰向けにねて天井を見上げるのが一番よいのである。

その壁畫の叙述は私の禿筆の及ぶ所ではない。殊に多くの學者藝術史家等による名文もあることであるからその描寫は今は差控え度い。唯その意外にもよく保存せられその元來の色彩美を失はないでゐるのは一つは洞窟内の日光に

曝されぬ所に永く忘れられ残されてゐたのにもより又一つには石灰質の薄層が上手にニスを掛けられた壁面を被つたのにもよることだが何れにしても唯々驚嘆するばかりである。

此の洞窟壁畫の發見者サウチュエラ (*Sautio-la*) 氏の娘マリア (*Maria*) は當時尙小さな乙女であつて實際はこれがその眞實の發見者であるが今尙附近の一寒村 (*Puente San Miguel*) に生存してゐる、もう大分の御婆さんであると主任の人は話して呉れた。

茫然として洞窟を出て來ると其處へ一人の亞米利加人が自動車でやつて來た。或る鑛山の技師であるといふ。共に案内せられて更に最近發見せられた新洞窟を訪れる。但しこれは舊石器時代の遺跡としては何等重要なものではない。人骨が發見せられたが新らしいものらしく、石器その他の遺物は未だ發見せられぬ由。それは一つに石筍、鍾乳石の層が非常に厚いためらしい。然しそれ丈天然記念物としては立派であ

る。この方も電燈の設備が出来てゐるが一度點燈すると恰も龍宮でも見る様だ。石灰岩が純粹で白色、透明の部分も多いらしくさらさらと美しく青や赤や黄に光る。思はぬ所で思はぬ石灰洞景を見ることが出来たものだ。

洞窟から歸つて悠くり陳列品を見せて貰ふ。サウチネロ氏 (D. Marcelino S. de Sautola) の蒐集とオーベルマイヤー氏 (H. Obermaier) の一九二四—一九二五年度發掘品が陳列の主要部分をなしてゐる。

やがて洞窟壁畫の方を見に行つて居たアメリカ人が入つて來てもう歸り仕度をしてゐる。そして自分の自動車に同乗させて上げようと言ふ親切を無にしても悪いと思つたから後は少しスビードをかけて漸く陳列品全部を見終り繪端書や案内書を買ひ購め主任の人にも厚く御禮を言つて去る。主任の人も何だか名残惜し相であつた。自分は又來ることもあらう、然し此の西班牙人にして見れば一寸日本へ來て我々同志を見

ることはまああり得まいから。

亞米利加人の技師は中々親切な快活な人であつた。色々話しかける。旅の道中では時々親切な仁に出會ふものである。

サンチラナへ來たので厚く謝して別れ、乗合の停る例の萬屋で一休させて貰ひ一時前トレラヱガのホテル (Hotel Comercio) に歸り一時中食、休息しながら覺書を認める。

昨夜來て呉れた佛蘭西語を語る一人の西班牙人が又來て呉れた。ビルバオ氏 (Bilbao) と言ふ。非常に親切に色々世話を焼いて呉れる。町の中を案内してやると言ふ。初めは少々有難迷惑と思つたが異國人の親切を無下に斷るのも禮ではない。それではとて散歩に出る。

町の市場を見る。矢張廣場になつてゐる。主には果實蔬菜類、それに衣類が商はれてゐる。聞けば毎木曜日市が立つのであつて、それで一週間の食料品が買入れられるのであると。

ゴシック風の町の御寺を訪れる。大して見る

べきものも無いがこんなちつぽけな町の寺としては立派だと思つた。餘り興味のないものに對してまで一々ビルバオ先生説明して下さるのは閉口した。

市場の廣場に歸つてそれに臨んだカフェーの二階に案内せられる。そして濃い珈琲の御馳走になる。村の色々の人達に軽くながら紹介せられるのには又閉口した。ビルバオ先生日本人と佛蘭西語を話しながら案内してゐるのが中々得意らしいのである。

第一大分の有閑階級らしい。自分の家を見て呉れと言はれる。何だか少々薄氣味が悪くさへなつたが西班牙人の住宅を窺ふことも一寸機會はあるまいと思つたら急にふら／＼として後から附いて行く氣になる。

假寓で大して立派な家とも思はれなかつたが洗面所から寢室から食堂から居間から風呂場から一々丁寧に見せられる。奥さんの居室に迄案内せられて紹介せられる。美しい中年の西班牙

美人であつた。

到々薔薇を作つた裏庭まで案内せられた。自分には到底もバラが好きなもんでと言ひながら一枝切つて與へられる。そして言ふことに「私は草花が到底も好きなんです、どうか日本の草花を送つて下さい」と。

西班牙式のバルコンは到底も氣持がよい。外部から見ても最も快いものと眺められるのはそれである。誠に氣の利いた建築美を添へてゐる。氣に入つた／＼と言ふものだからビルバオ先生も大満足の體である。去るに臨み茶色の土製の西班牙美人の人形を贈られたのには感謝の辭もなかつた。氏は詩も作る相で闘牛に關する自作の活字になつたもの二三を示された。それで合點が行つた。常人では無いと思つたが。

一旦商人宿に歸り休憩、それから又たビルバオ氏に案内せられてトレラヴェガのコンデンスド・ミルク製造工場を見る。Fabrica de Leche Condensada "El Niño" 即ち小兒印コンデンス

ト・ミルク(Harina Lacteada) 製造工場と言ふ譯である。工場長に紹介せられ技師長に案内せられて有益な説明を聞いた。此の種の工場を見た最初である。偶然と言ふものは不思議なものである。廣告のためとあつて小蠶一個を興へらる。

土俗品として面白いものには支那式の幌馬車が行はれてゐる。二輪で車體の上に蒲鉾形の幌が附いてゐる。但し此の幌は支那式のものをも少しへちやげた形をしてゐる。又木靴に四本の齒の着いたものを見るが正に靴と下駄との相の子の御化けである。

色々面白いものを見聞したが流石に疲れた。厚くビルバオ氏に謝し別れてホテルに歸り六時半まで休む。

六時四十分トレラヴエガのカンタブリカ驛(Cantabrica)を發ち間もなく北驛に着、手まね指真似でマドリッド行二等車の切符一枚を求め七時十四分トレラヴエガ北驛を出發。

十時レイノザ驛(Reinosa)のビュフェで夕食十一時寝に就いたが獨り旅の心もとなさど時候外れの寒さの爲に餘りよくは眠れなかつた。

五月二十四日、金曜日。七時眼が覺めると汽車は全く乾燥の荒地を走つてゐる。樹木の蔭も殆んど見當らぬ。地質は花崗岩であるらしい。處がそんなに乾燥したらしい土地にも家がちらほら見える。牧場があり牛が呑氣に遊んで居る。雨が降り出す。こんな所にも雨が降るのかと思はれるが事實だから致方ない。

七時十五分エスコリアル驛(Escorial)着。療養所かとも思はれる大きな建物が見える。沿線には橄欖の木が多數に認められる。

八時過マドリッド驛(Madrid)着。九時フロリダ(Florida)館と言ふ一流旅館に入る。

十一時國際聯盟協會の會場に中村君を訪れ一所に自然史博物館を訪れエスカレラ嬢(Emma Escalera)に紹介せられ動物の部、礦物の部、先史部、圖書室等に案内せられる。

エ嬢からベニテーズ氏 (Benitez) と云ふ畫家に紹介せられ此の人から舊石器時代壁畫の未發表の複寫などを見せて貰ふ。

最後に講義室、館長室に迄案内せられる。エスカレラ嬢が始終美しい佛蘭西語で説明せられ顔も美しく心も優しいのにはほれ／＼して仕舞つた。それに博物館の蒐集品は極めて豊富で圖書室も中々充實して居りこんな所で一年も仕事をして見たらなど言ふ野心も起さた位である。

正午になつたので厚く謝して館を辭し中村君と中食を共にし午後は一寸國際協會の方を覗いて見る。

四時半出でて市内を散歩、疲れて宿に歸り八時迄休む。再び出でて中村君、聯盟協會の福島氏等と市内を散歩、九時半宿に歸り十時夕食。食堂の音楽は中々よい。

食後廣間に休憩してゐるとじろ／＼こちらを見る日本人が居る。話して見ると中學の先輩菅氏である。十五年振りの再會で、正にマドリッ

ドの奇蹟と言ふべきだ。手紙を書いて十一時就寢。

五月二十五日、土曜日。八時半起床、先づ昨日博物館で得た出版物目録に見入り、十時朝食、十時半出でて博物館を訪ふ。

先づ地質學の部殊に洪積世の部を見る。シエレン、ムステリアン、オリナシアン、ソルトリアン、マグダレニアン、アジリアン期のものが殆んど無數に陳列せられてゐる。眼の正月だ。

館長室には此の博物館の創設者カルロ三世陛下 (St. M. el Rey D. Carlos III) の肖像畫が掲げられてゐる。

出版物が欲しいのであるが助手の人が佛蘭西語を解しないのでマドリッド大學エントモロジの教授ポリバル氏 (Bolívar) に通譯を乞ふ。日本の學者のやつてゐることに敬意を拂つてゐると言はれる。厚顔であるが序でにロヨール教授 (Royou) 教授とその親友、マドリッド中學教授ゴ

メーズ(Gomez)氏に紹介して貰ふ。

此の後の二人が又到底も親切な人なんである。自身發見蒐集のシェレアン期、アシューレアン期の石器、動物化石等を澤山に出して見せられる。何れもマドリッド郊外の發見と言ふから特に興味深い。そして明日は日曜日だから遺跡へ案内してやると言はれる。

ロヨール教授から西班牙先史學界に此の人ありと知られてゐる舊石器の伯爵 (Conde de la Vega della Sella)に紹介せられる。西班牙の大山柏公である。丁度何か室で仕事をして居られる所であつたが非常に喜んで迎へられ、最近發見未發表のシェレアン期、アシューレアン期、ムステリアン期の遺物を示された後、陳列室の先史學部に案内せられ一々丁寧に説明をして下さる。佛蘭西ではどんな勉強をして居るかとか聞かれ、もつとなぜ早く西班牙に來なかつたか、西班牙には幾等でもやる仕事があるし、それをやれば面白いのだが、暫く西班牙に滞在しない

か等勧められ本當に親切な人だと思つた。何だか湖沼學の田中阿歌磨先生が思ひ出せて仕方なかつた。

正午出でてカステラナの大通 (Pasaje de la Castelana)を散歩して見る。これは丁度巴里で言へばシャンゼリゼの大通りに當るであらう。立派な美しい住宅が立並び、行交ふ人々も乗り行く車馬も物皆が垢抜けしてゐる。並木が殊に美しい。

考古博物館に行つて見る。大したものはない。原史時代の部に多少の石器類が陳列せられて居るが見るべきものもない。寧ろ此の博物館は歴史博物館と云ふべきである。

三時出でてカフェーに入り牛乳コーヒーに小さな菓子をとり中食をする。ギャルソンが註文品を頭に載せて持つて來るのには驚いた。田舎へ行つた様である。

三時半再び自然史博物館に入り午前の續きを見る。主として舊石器を見たのであるが人骨と

してもバニョラス人骨として喧傳せられてゐるものを見ることを得た。一八八七年カタローン地方バニョラス(Lago de Barolas)の更新期石灰質凝灰岩中より發見せられたネアンデルタール型人下顎骨である。之れを第一の大物として幾多の舊石器時代遺物が陳列せられてゐるがそれは西班牙國內發見の遺物のみではなく、サハラやアルゼリアの發見品もある。アルゼリアのものにはシュレアン期アッシュレアン期のもの外にカブシアン期及新石器時代のものがある。尙今まで餘り見なかつたものとしては葡萄牙のアストリアン期(Asturienne)の中石器と稱するものが葡萄牙からの寄贈品として陳列せられてゐるのを見た。

五時半陳列品を見終りほつとした思ひで博物館の庭に出で暫らく茫然として休息する。六時になつたので宿の方を指す。

白衣のコンミュニオンの乙女子が何とも言はず優しく可愛らしい。純潔そのものと言ふ感じ

を與へる。十三詣りの乙女とは全く正反對の美しさを有つてゐる。上町の子守女が又面白い。頭には特別の頭飾りを着けてゐて子守女と直ぐ解るが服装も又普通の女とは全然異つてゐる。そして中には中々の別嬪も居る。女供は勿論可愛ゆく美しい。此の子守女の群は又たマドリッド上流社會住宅地特有の光景であらう。

宿に歸つて休息しながら手紙を書き七時再び出でてコロンブスの銅像を見る。非常によく出来てゐると思ふ。暫く像の前に佇立して今更ながら當時の歴史を回顧する。西班牙も一時は大いに隆えたことがあつたのである！ 廣場には女の子が縄飛びをして遊んでゐた。日本と同じ様なやり方で。

中央大學と言ふのを訪れる。然しこれは豫期を裏切つた。非常に貧弱なものであるし第一その區域が人氣の惡そうな下品な街である。司法省(Ministro de Jurico)もその附近にあるがその邊も矢張りいやな街である。

怪しげな西班牙語と手眞似で鉛筆を買つて八時宿に歸り全宿の嘗、中西兩氏と語り九時半夕食、某氏が中村君に賣つて來た喧嘩を僕が買受け散々にへこませた揚句十一時半久し振りに一風呂浴び十二時就寢。

五月二十六日、日曜日。八時起床、朝食を済ませてホテルの廣間に待つてゐると九時頃約束の如くロヨール教授とその友人マドリッド中學教授ルエカ氏(Lueca)とが同道で迎へに來て下さる。ロヨール氏は理學博士で博物館の教授、古生物學専門である。ルエカ氏も理學博士で藥劑師の免狀を有し中學教授、専門は古生物學で特に哺乳動物とフォラミニフェラとに興味を有つてゐる。そして兩人共舊石器の研究にも關心を有してゐるのであるが今日は遠來の客を郊外サン・インドロ(San Isidro)の遺跡に案内してやらうと言ふのである。案内者として申分あらう筈はない。私は唯々感激の外なかつたのである。初め電車で行く。果物蔬菜類の市場がある。

毎日開くと云ふ。

トンド門(Puerta de Toledo)より下車、それから徒歩で行く。遺跡は想像したより遙かに近う。河の上のトンド橋(Puente de Toledo)から直ぐ先に見える。

ロヨール教授が懇切に説明して下さる。河をマザナールレス(Manzanares)と言ふ。マドリッドの市街は中新期の基盤上に載つてゐる。右岸には中新期層の上に洪積層を載せてゐる。遺跡の砂採場には基底に洪積期の圓礫層があり其中から舊石器を産する。其の上には粘土質の細砂層、更に其の上には粗砂層、最上層に腐植土がある。粗砂層には時として有機質の炭層を挟むと言ふ。

寶の山にでも入込んだ様な氣がして鵜の目鷹の目で石器を探す。あちらの露頭をいぢつたりこちらの断面をほじくつたり。然し中々急には出て來ぬものらしい。博物館や個人の收藏に歸してゐる石器の類は實に莫大の數に達する。併

しながら此等を得るためには幾何の土砂を掘つたか知れないことを注意しなければならぬ。一寸ハンマーやシャベルで掘つた丈けでさう易々と石器が出て来るものではない。さうかと言つて日曜日で砂採人夫も居るか居らぬかの姿である。自分はもう悲觀するの外なかつた。

所がロヨール先生ルエカ先生は流石に砂採場でも御顔なじみだ。何處からともなく子供が出て來た、砂採人夫の子供である、そして手には一杯石器を持つてゐる。大した金にもならないが學者好事家が喜んで持つて歸るので砂採の際氣を着けてとつて置くのだ。その後又こんなに集まつたのであらうか。去年劍橋で買つた小形のルックサックを用意して來たのがもう一杯になつた豈ほく／＼せざるを得んや。

シエレアン、アシユレアン期の而も西班牙の舊石器は日本へのよき土産になるぞと思ふと嬉しくて仕方がない。つい酒錢をはずんでやらうと云ふ氣になつた。ロヨール先生に耳打するとそ

んなに多く遣つて貰つては後が困る仕舞つて置いて呉れとのことである。西班牙は舊石器研究者の樂土である。土地所有者も何一つ文句を言はなかつた。

厚く砂採夫父子等に禮を述べ此の記念すべき遺跡を去る。荷物は重くなつたが何を厭ふものか、それ丈け嬉しいんだ。

場末の河原の邊りで土器を賣つてゐる。水を運ぶための甕である。誠に西班牙色濃厚なるものがある。中々澤山のストックだ、あれが皆賣れるのか知らと思はれる位である。

荷物が重いので電車で北驛に行き一時預かりして貰つて身輕になつた上で靜かに郊外を散歩する。榆、マロニエ、アカシアなどの並木が美しい。晩春と言ふよりは初夏である。南國の並木道の散歩、到底その快味を筆に現はすことは不可能である。並木道から入込んだ遊樂場では今、音楽が切りに奏でられてゐる。青年男女が日曜日を躍り楽しむのであらう。サン・アントニオ(San

Antonio) のヘルミタージュに案内せられ殊にその壁畫を興味深く見た。

一時ラ・フェルタ(Restaurante "La Huerta")と言ふ料亭に案内せられ中食の御馳走になる。ラ・フェルタと言ふのは Campagne Cultivee の意である。露天の緑の樹蔭で乾燥した日曜日の大氣を滿喫し甘美の西班牙酒を味はひながら吾々は胸襟を開いて相語つたのである。料理も又佛蘭西料理とは何處となく異つた一種特別の西班牙味があつて嬉しい。オムレツ、カニ、鶏等を食つたのであるが此の食事は恐らく一生忘れないであらうと思ふ。

二時半迄歡談した後電車で北驛に引返しルックサックを受とりタクシーでホテルに歸る。二人は料亭の拂ひから電車代からタクシー代まで何から何まで支拂つてどうしても私しに拂はせない。せめて夕食でも一所に食べ度いと申出ても難有いが差支があるからとて受けられない。西班牙人は餘程日本人と共通した性質を有つて

ゐると思つた。少くとも一般の歐羅巴人とは大分異つた所があると思つた。ホテルで休息しながら尙暫らく話を續けやがて名残を惜しんで歸つて行かれた。私は唯あつけに取られるばかりでした。

即ち出でて市中を散歩する。人類學博物館、プラド(Prado)博物館、イスバニヤ銀行、海軍省、植物園などを見物して行く。流石に古い文明國丈けあつて文化施設は充分整つてをり建造物なども中々堂々としてゐる。

四時過ホテルに歸り、中村君と話す中に五時になつたので山田先生、中村、中西、福島の諸君と闘牛見物に出かける。五時半に初まる。私は闘牛を見た。そしてそれは正に天下の奇觀であることを知つた。然しながら私しは今それを細々と叙述しようとは思はない。餘りにそれは慘酷な光景であるから。唯私しは觀覽席の棧敷に美しい毛氈などを飾り繞らし黒や赤などのシルを懸けた西班牙女の美しくも優美であつた

こと丈を記すに止めやう。偶にはそんな事もあ
ると云ふが闘士が牛に突かれ痛手を負ひながら
も尙も猛然と奮ひ立つて一太刀指し込みそれで
やつと名譽回復の難業を遂げた安心と疲労とで
ばつたり人事不省に陥り場外に運び去られて行
つた光景は思ひ出すだに手に汗せしめるのであ
る。牛の殺し方の慘酷野蠻なことなどはずも

伊太利ところぐ (二八)

瀧川規一

がな。

七時半終る。觀衆はなだれを打つて場外に出
る。自動車の流れが町の方を指す。

キャフェーに入つて話しながら元氣を回復、八
時半ホテルに歸り明日出發の準備をなし十時夕
食、十二時迄諸君と語り就寢。(未完)

〔フ市の掘出し物と批判〕 詩人ブラウニング
がフロレンス市で一小冊子を古物店から掘出し
た。内容は伊太利の一貧乏貴族が若妻を殺ろし
た殺人事件を取扱つた裁判記録の寫しとこれに
伴ふ顛末を叙したものである。ブラウニングは
直接關接の關係者の言ひ分を詩化して一大長篇
の傑作を作つた。殺ろした者殺ろされた者、殺

伊太利ところぐ

人幫助者、若妻の誘惑者、若妻の兩親、原告被告
夫々の辯護者等の主張辯疏、最後の判定を下し
た法王の斷案等をブラウニングの詩で讀み且つ
該件記録の詩化せざる翻譯文を讀む。感ずる處
は殺人事件と云ふ一人事が各人の見方によつて
斯くも色彩を異にし得るかと云ふことである。
今日新聞紙上で屢々見受ける一審二審若くは

七

六七